

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 9 月 4 日現在

機関番号：34431

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380814

研究課題名(和文)在宅失語症者の言語的活動の拡大に有効な環境要因の検討

研究課題名(英文) Investigating environmental factors effective for expanding communication activity of homebound individuals with aphasia.

研究代表者

森岡 悦子 (Morioka, Etsuko)

関西福祉科学大学・保健医療学部・教授

研究者番号：70441334

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：回復期リハビリテーション病棟で3ヵ月以上言語聴覚療法を受けた後に在宅復帰した失語症者において、退院後の実用的コミュニケーション能力に関わる言語的活動の拡大に影響する要因を検討した。退院時と退院後に実施した評価を分析した結果、言語的活動の拡大には、言語機能以外に、コミュニケーション自己効力感に基づく家族の言語的関わり、失語症者自身の代償的手段の使用、言語的行動性などの要因が影響することが示唆された。退院後のコミュニケーション力への支援として言語的環境を整えることが有効となることが示された。

研究成果の概要(英文)：We investigated the environmental factors effective for the expansion of communication activity of individuals with aphasia. The subjects were patients with aphasia caused by cerebrovascular disorder, living with their families after receiving speech-language-hearing therapy at a convalescent rehabilitation ward. We evaluated them during discharge and thereafter, assessing language function, cognitive function, and environmental factors such as language behavior and the communication self-efficacy. We found that the effect of language function on communication activity diminished after discharge; the post-discharge communication activity had been strongly influenced by linguistic environmental factors such as family conversation method, compensatory reactions, and linguistic behavior. It was suggested that it would be effective to manipulate the language environment to support the communication of aphasic patients after their discharge.

研究分野：社会科学

キーワード：失語症 コミュニケーション能力 言語的活動 社会支援 言語的環境調整

1. 研究開始当初の背景

失語症は、脳血管障害や脳外傷などにより大脳の言語中枢が損傷されて生じる言語機能自体の障害であるため、退院後もコミュニケーション障害が残存するケースが多い。生活においては、意思決定や活動の制限、役割の変化などに直面し、心理社会的問題が生じやすいことが指摘されている。しかし、失語症者のこのような問題に関して、社会の認識は低く、コミュニケーション支援も少ない現状にある。

2. 研究の目的

先行研究より、維持期失語症者のコミュニケーション能力には言語的活動が関与することが報告されている(森岡 1996)。そこで本研究では、失語症者の背景要因と言語的活動との関連を検討することにより、失語症者が生活の中で言語的活動を維持拡大するために有効な要因を分析し、必要な支援の手がかりを見いだすことを目的とした。

言語的活動を維持拡大するために有効な要因を分析することは、維持期の失語症者のコミュニケーション障害に対する具体的な支援策の示唆を得ることが期待できる。

3. 研究の方法

対象は、研究協力施設の回復期リハビリテーション病棟で3ヵ月以上言語聴覚療法を受けた後在宅復帰した失語症者とした。退院時と退院後の評価として、言語機能は標準失語症検査(以下、SLTA)、コミュニケーション能力は実用コミュニケーション能力検査短縮版(以下、CADL)、認知機能はレーブン色彩マトリックス検査(以下、RCPM)を用いて評価した。退院後評価では、さらに、家族構成、社会的資源の利用状況を聴取し、同居するキーパーソンとなる家族に、コミュニケーション自己効力感尺度評価(以下、CSE)、コミュニケーション行動の家族質問紙(以下、CADL-FQ)を実施した。退院後評価は、退院後約6~8ヵ月に第1回評価を実施し、その後約6~8ヵ月の期間に第2回評価を実施した。

4. 研究成果

(1) 退院後評価(第1回)の結果分析

退院後の第1回評価を共分散構造分析により解析した。適合水準を満たすモデルが得られた(図1)。CSEがCADL-FQに關与を示し、CADL-FQは言語機能SLTAとともに言語的活動に影響し、言語的活動は、コミュニケーション能力CADLと、知的機能RCPMに影響するという関連が示された。言語機能は言語的活動を介してコミュニケーション能力を高めること、またCADL-FQに、家族のCSEが言語的関わりとして失語症者の言語的活動を促進する可能性が示唆された。

言語的活動に、言語機能SLTA以外に、言語的行動CADL-FQが影響すること、CADL-FQに家族のコミュニケーション自己

効力感CSEが言語的関わりとして影響することが示された。失語症者のコミュニケーション能力につながる言語的活動性に対し、環境的な可変要因を見出せたことは、生活場面への介入や社会的支援を考える上で意義深い。

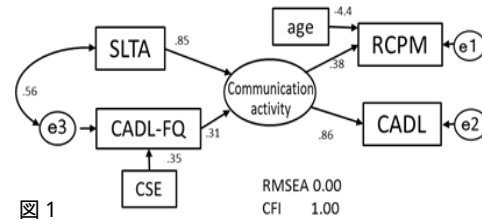


図1

(2) 言語的行動CADL-FQのコミュニケーション能力への影響

多変量解析により、退院時言語機能、認知機能、言語的行動、年齢、在院日数、退院後経過日数、同居人数などの諸因子を説明変数とし退院後コミュニケーション能力への影響を分析したところ、コミュニケーション能力、認知能力の他に、言語的行動CADL-FQに關与が認められ、日常の言語的行動の重要性が示唆された。

さらに退院後の言語力とCADL-FQとの関連を分析すると、下位群では言語的に比較的容易な、理解に基づく言語行動や主体的行動の項目で、向上群は非向上群に比べ有意に高く、自らの言語力で実行可能な言語行動を確実に実践することが言語力向上につながる可能性が示唆された。

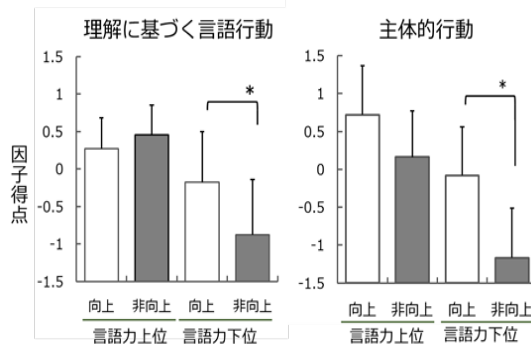


図2

(3) 失語症家族のコミュニケーション自己効力感と、失語症重症度との関連

失語症家族のコミュニケーション自己効力感と、失語症者の失語症重症度との関連を分析した。CSEの因子分析より、会話環境への配慮、コミュニケーションツールを適切に用いる配慮、失語症状への心理的配慮が潜在因子として抽出された。失語症者の重症度は、軽度群、軽~中等度群、中等度群、中~重度群の4グループに分類された。軽~中等度群の家族は、失語症状への心理的配慮が低く、症状対応への自己効力感が低いことが示唆された。会話環境への配慮、コミュニケーションツールの使用の自己認知は高く積極

的な会話状況が示された。中等度では、会話場面への配慮より、コミュニケーションツールへの自己認知が高く、ツールを駆使した実践的な会話状況が示唆された。中～重度の家族では、会話場面への配慮、コミュニケーションツールへの配慮ともに認知は低く、会話への取り組みを回避する状況が示唆された。重度になるほど、会話環境の配慮やツールの適応は難しく、効果が得られにくいことが原因の一つと考えられる。維持期にはいっても経過に伴い、家族に丁寧で具体的なコミュニケーション指導を行い、失語症者と家族の両者のコミュニケーション意欲を高めるための介入と支援が必要と考えられる。

また、コミュニケーション能力の向上群と非向上群で家族の自己認知を比較すると、会話環境への配慮やコミュニケーションツールへの配慮の因子得点は、向上群が高く、両群に有意な差が認められた。失語症の軽中等度群、中等度群においても、症状に応じた言語的関わりができるよう、介入と支援が必要であることが示唆された。

#### (4) 経時的経過の検討より

退院時評価、退院後第1回評価、第2回評価におけるコミュニケーション能力を経時的に捉え、諸因子との関連を分析したところ、常に言語機能 SLTA の影響は強いものの、影響の変化に注目すると、SLTA の影響はやや減少し、一方で CADL-FQ の影響が徐々に増大した。また CSE は、重症度により異なるが、特に軽～中等度と中等度で CADL-FQ への影響が認められた。失語症の退院後の生活においては、SLTA からコミュニケーション能力への影響は、退院後1年で低下した。これは、退院後の SLTA 以外に言語的環境要因の影響を強く受ける可能性を示しており、退院後のコミュニケーション能力の向上に言語的環境要因が強く関わることを示唆された。

また、言語的活動を数値化し、第1回と第2回評価の変化から向上群と非向上群に分け、両群の CADL-FQ と CSE の値を比較したところ、いずれも向上群の値が有意に高い結果が得られた。言語的活動は、CSE-FQ と CSE の影響を受け、経時的にもその傾向を示した。言語的活動とコミュニケーション能力は、言語機能の影響を受けるが、生活における家族の言語的関わりへの配慮、失語症者自身の代償能力、言語的行動などが、影響を持つことが示された。これらの側面への支援が在宅失語症者のコミュニケーション力を支える上で重要であると言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

森岡悦子, 中谷謙: Communication Self-Efficacy Scale の分析にみる失語症家族のコミュニケーション対応における課題. 失語症重症度との関連から. 音声言語医学, 査読有, 59, 2017 (印刷中)

森岡悦子: 失語症によるコミュニケーション障害の言語聴覚療法と言語的環境調整について. 保健医療学雑誌, 査読有, 8(1), 73-79, 2017

藤田高史, 能登谷晶子, 砂原伸行, 中谷謙, 加藤清人, 永井貴士, 井上克己: アルツハイマー病者の IADL に影響する高次脳機能障害についての検討. 机上 IADL 検査を用いて (Cognitive dysfunction affecting instrumental activities of daily living in patients with Alzheimer's disease: a comparative study using the At-the-Desk test). 金沢大学つるま保健学会誌, 査読有, 40(2), 45-55, 2017

福永真哉, 服部文忠, 中村光, 中谷謙, 平田幸一: 失語症患者の言語・認知機能障害とコミュニケーション活動制限の経時的変化. WAB 失語症検査と短縮版 CADL 検査を用いた検討. 認知神経科学, 査読有, 18(1), 30-37, 2016

松尾貴央, 松山美和, 渡辺朱理, 中谷謙: 嚥下障害のスクリーニングテストの比較研究. 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌, 査読有, 20(1), 3-10, 2016

砂原伸行, 中谷謙: 左半球損傷による右半側空間無視例の音の方向感認知能力. 金沢大学つるま保健学会誌, 査読有, 40(1), 75-82, 2016

〔学会発表〕(計8件)

森岡悦子, 福田優佳梨, 金井孝典, 仁井恒介, 田抜良江, 小泉幸毅: 回復期リハビリテーション病棟退院後の失語症者の言語力の経過. CADL-FQ にみる言語的行動と言語力の関連. 第29回研究大会 回復期リハビリテーション学会 2017年2月(広島)

仁井恒介, 金井孝典, 森岡悦子: 失語症家族へのコミュニケーション指導. PACE を用いて. 第29回研究大会 回復期リハビリテーション学会. 2017年2月(広島)

松尾貴央, 中谷謙, 上杉康夫, 森岡悦子, 他: 超音波断層法を用いた嚥下運動の評価法の確立. 第7回 総合福祉科学学会 2017年3月(大阪)

金井孝典, 森岡悦子, 小泉幸毅: 複数の AAC 適応により実用的コミュニケーション能力が向上した中等度失語症の一例. 第 17 回日本語聴覚学会. 2016 年 6 月 (京都)

森岡悦子, 鈴木優佳梨, 財前有希, 他: 在宅失語症者の実用的コミュニケーション能力に影響する要因の分析. 回復期病棟退院後の失語症者を対象として. 第 28 回研究大会. 回復期リハビリテーション学会. 2016 年 3 月 (沖縄)

上野千夏, 森岡悦子, 金井孝典, 鈴木優佳梨: 失語症者の退院後生活に対する支援のあり方について. 訪問 ST の視点から. リハビリテーションケア合同研究大会. 2014 年 11 月 (長崎)

三角幸子, 金井孝典, 森岡悦子: 重度失語症者に対する VAT によるジェスチャー練習の効果について. 2014 年 11 月 (長崎)

金井孝典, 森岡悦子: 仮名に選択的な純粹失読例における仮名文字列の処理過程の検討. 第 38 回日本高次脳機能障害学会. 2014 年 11 月 (仙台)

〔図書〕(計 1 件)

森岡悦子: 標準言語聴覚障害学 (藤田郁代編) 失語症学 第 2 版 (分担) 失語症の言語治療. 実用的コミュニケーション訓練 pp225-229. 医学書院. 2015 年 2 月

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

〔その他〕なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森岡悦子 (MORIOKA ETSUKO)  
関西福祉科学大学・保健医療学部・教授  
研究者番号: 70441334

### (2) 研究分担者

中谷謙 (NAKATANI KEN)  
関西福祉科学大学・保健医療学部・准教授  
研究者番号: 90441336